コラム 9-4　パーソナリティ（性格）とその評価

日常的には「C さんは性格がいいよね」というような表現をすることがありますが，パーソナリティの良い悪いは，科学的な意味では存在しません。つまり，科学的な意味では性格に価値づけは行いません。たとえば「外向性－内向性」という基本的性格の次元での個人差については，外向的なほうが良いというイメージが一般的にあるのかもしれませんが，実際には，外向性が好ましい形で表れれば「社交的，行動的」という傾向になりますが，悪い形で表れれば「ずうずうしい，でしゃばり」という傾向として表れるかもしれず，外向的だからといって必ずしも良いとも悪いとも言うことはできません。

もともと「外向」という訳語のもとである extraversion という語は，自分が行動するときの基準をどこに求めるかという意味を含んでおり，日本語で「外向（き）」という訳語が当てられたのは，他人や社会という外を基準として行動する，つまり周囲に合わせて行動することにつながる意味を含んでいます。したがって，日本のように周囲に会わせることが良いとされる社会では，外向のほうが好ましいとされることが多く，また生きやすい傾向があることは事実かもしれません。一方 introversion の訳語である「内向」は，基準が内向き，つまり自分の中の基準で行動や判断をすることを意味しており，無理に周囲と合わせようとはしない傾向と結びついています。心理学的には日本社会は外向的な傾向があるので，内向的な人の方が生きにくい傾向があるかもしれません。

なお，日本では社会的な背景から一般的に外向的なほうが好ましいとされる傾向がありますが，イギリスなどでは，内向の方が外向より好まれる傾向があるというように，「外向－内向」のような基本的な性格傾向の違いでも，その社会的な評価には違いがあります。しかし，心理学的には，外向－内向で好ましさに違いがあるわけではなく，パーソナリティの特徴には（反社会的な傾向でない限り）特に価値づけはありません。